

NY 発

NPT 再検討会議 代表団ニュース



第4号 2015年4月30日

〒150-8913

東京都渋谷区渋谷3-29-8 ユーブ・プラザ 11F

日本生協連 組合員活動部

TEL: 03-5778-8124

FAX: 03-5778-8125

4月28日（NY現地時間）の活動

・国連本部ロビーで開催中の原爆展での「被爆の証言」

☆ 11班 原爆展での証言活動（10～12時）

被爆二世の方を含めて、3人の方が証言活動を行いました。原爆展2日目ということもあり、昨日よりも多くの方が原爆展に来ており、60人ほどが熱心に被爆者の証言を聞いていました。特に日本の若者の姿が目立ち、「とても衝撃的な話だった、日本の若者として被爆者の想いを次世代に引き継いでいかなくてはならない」と感想を述べていました。

若い方が真剣に証言を聞いていたのがとても印象的で、次の世代に継承していくことの大切さを改めて感じました。



証言活動の様子

☆ 4班 原爆展での証言活動（15～16時）

サポーターである生協代表団として、若手職員と大学生協が日ごろの組合員対応で学んでいることを活かし、直接国連ロビーを訪れている方々と接して、証言へご案内したり、折り鶴や証言の用紙を渡したりと活動支援を行いました。



英語の呼びかけ文を作成し、国連ロビーを通る方へアピール



来場者に折り鶴などの説明をする生協代表団メンバー

・学校などでの証言活動

☆ 1班 ニューヨークラボ中学校での証言活動

約50人の生徒に向けて、被爆者の木村さん、鯨名さんが証言活動を行いました。質疑応答では、生徒たちの積極的な質疑が途絶えることなく、終了予定の11時を過ぎるほどでした。終了後も、平和を願う横断幕に積極的にメッセージを寄せていました。また、今回は、中国新聞社のジュニアライターも参加しており、生徒や証言者と交流しました。

今回で3回目の参加となる証言者の木村さんは、「今回のように質問が途絶えない事は初

めてだ」と、今回の証言活動がとても充実したものだだったと振り返っていました。

私たち生協のサポーターにとって、証言活動に参加するのは初めての経験でしたが、先生方をはじめ、生徒たちの真剣な眼差し、前日に事前学習が行われるほどの好奇心の高さに胸を打たれました。



証言者の木村さん



参加者と交流するジュニアライター

☆ 2班 ハーベースクールでの証言活動

14歳から18歳までの生徒約300人が参加してくれました。関心の度合いは人それぞれのようにでしたが、質疑応答では積極的な姿勢がうかがえ、被団協の方々も熱心にそれに答えていました。

多くの人が集まってくれたことに驚き、うれしく感じました。また日本人とは違った観点からの質問が多く、海外で被爆の証言を行うことの難しさや、やりがいも感じました。



学校の方々と、証言者の
齋藤さん（中央右）、松浦さん（中央左）

☆ 3班 仏教会（New York Buddhist Church）での証言活動

仏教会から7人が参加しました。住職さんと、僧侶でもある東條さんの法話（お話）を伺い、東條さん、堀場さん、被爆二世の田崎さんの証言を行いました。手作りのおはぎなどをいただきながら交流もできました。参加者から「自分の世代でも引き継げることがあるのではないかと思った」という感想があり、若いメンバーにとっては、被爆二世の証言が身近に感じられ印象に残りました。



仏教会の証言会場の様子

☆ 4班 グリニッジ日本人学校での証言活動

ニューヨーク市から1時間鉄道にゆられ、グリニッジ日本人学校で証言活動を実施しました。小学校1年生から中学校3年までの幅広い年代の生徒さん約150人と先生方が参加しました。3人の被爆者がそれぞれ10分ずつ証言し、「当時の体験を伝え続けていくこと忘れないでほしい」と訴えました。質疑応答では、「どの時点で爆発したのか」、「爆弾は1発だったのか」など、核兵器の威力についての質問が様々な学年から出ました。

最後、生協団から折り鶴を児童に、証言集を学校に贈ることができました。最後に児童からは感謝の言葉が述べられ、プレゼントを被爆者に渡して終了しました。



証言の様子

☆7班 スタンフォード英語アカデミーでの証言活動

様々な国からの41人の参加者に向け、被爆者の加田さんと宇田さんが被爆の証言を行いました。また、資料の展示や平和の願いの寄せ書き、参加者との交流会も行い、ボランティアや学校の温かいサポートを感じることができました。

参加者の反応や質疑応答から、原爆のことだけでなく二次的な被害が子孫にも影響することに関心が強いことが伺えました。この先どのように行動していくかを考えている人もいました。お菓子やフルーツを食べながら、核兵器や平和について話をするができることは発見で、今の生活の基盤である平和について、このように身近に話すことができる場を生協でも作っていきたいと思いました。



証言を行う宇田さん（左）加田さん（右）



証言のあと、被爆者と交流する参加者

☆11班 グレースチャーチスクールでの証言活動

グレースチャーチスクールの14歳～16歳の生徒170人に向けて、3人の被爆者が証言活動を行いました。みな真剣な表情で被爆者の話を聞いており、中には涙を見せたり顔をゆがめたりしている子もいました。証言が終わった後に質疑応答の時間がありましたが、日本の世論や市民感情の変化についてたずねるなど、とても鋭い質問がありました。

子どもたちだけでなく、先生方もとても興味を持って話を聞いていたのが印象的でした。学校全体が今回の証言活動に対してとても協力的で、終始良い雰囲気で行うことができました。また、質疑応答の時間を通して、私たち自身も彼らの質問に答えられるぐらい、しっかりと自分自身の考えを持っていなくてはならないと感じました。



証言活動の様子



証言が終わり握手する被爆者と生徒たち

☆9班 ホワイトプレインズ高校での証言活動

歴史の授業の一環として、証言活動が行われました。皆熱心に証言を聞いてくれ、被爆者に対する温かい励ましや、感謝の言葉もいただきました。「教科書だけでは学べない。生の被爆者の声が聴けて良かった」「本当に感激した。世界平和のために頑張りたい」という意見もありました。証言終了後、多くの生徒さんが平和の寄せ書きにメッセージを書いてくれ、千羽鶴も大変喜ばれました。



講演後生徒さんから絵のプレゼント

☆9班 JAGL と JAJA のジョイントセッションでの証言活動

日系人の団体 3 団体合同の会合に招かれ、証言活動を行いました。参加者は 50 人ほどでした。質疑応答では、日本での原爆教育や、原爆と原発の関係などについて質問が出ました。終了後は、被爆者と交流を深めるために行列ができるほど、関心が高いことが伺えました。



証言の様子

☆14班 ペンシルベニア大学での証言活動

大学生・高校生・日本人会他 約 100 人に向けて、被爆の証言を行いました。この活動は、ボランティアの皆さんのつながりで実現しました。企画をしてくださったロブさんのおばあさまは広島出身です。大学到着後、通訳をお願いしていたチャンス教授と、準備していただいた昼食をいただきながら、タイミングなどの打ち合わせを行いました。

会場は、大学生や高校生、日本人会などの参加者でいっぱい、3 人の証言を聞いていました。証言が終わると、感想や質疑応答が次々に出て、被団協のメンバーもそれに一生懸命答えていました。

最後に被団協メンバーのお一人から、こんなお話を聞くことができました。「私は、結婚を申し込まれたとき、正直に被爆者であることを話したら、夫は、知っていた、と言いました。夫の義父はとても厳格な人だったので、大丈夫かとたずねましたら、『何 10 万という人が死んだ中で、生き残ったのだから、この人は、命の尊さと平和の大切さを知っている人だ』と言ってくれました。夫のことはよく知らなかったけれど、こんな親に育てられた人だから、きっといい人だろうと結婚を決意しました。今回、ここへ来るときにも、夫に背中を押されました」。

チャンス教授は、これを通訳しながら、涙を流していらっしゃいました。



会場の様子
一番手前がロブさん



チャンス教授 (左)

・メディアでの証言活動

☆ 8班 サイエнтиフィック・アメリカン誌の証言インタビュー

8班と13班の被爆者4人がアメリカの科学雑誌サイエнтиフィック・アメリカンの取材に応じました。被爆した際の情景、そのときの思い、現在の思いなどを中心にインタビューが行われ、リアルな証言に、ときには記者の方も目を潤ませていました。質問のひとつに、福島原発事故についての意見を問うものがあり、海外の方々の核兵器、核エネルギーに対する関心を再認識することができました。

また、70年前の一瞬の出来事について、熱く、具体的に語られる被爆者の方々を見て、改めて核兵器の恐ろしさ、それを落とされたときの衝撃を感じ、追体験することができました。



取材に応じる被爆者

・国連代表部での核兵器廃絶の要請活動

☆ 1班 英国政府国連代表部との面談

生協サポーターが後方で見守る中、終始和やかな雰囲気での面談が進行し、要請書や証言者の体験手記等を代表部へ手渡しました。

冒頭、英国政府国連代表部より、「核兵器廃絶に向け、核兵器を180→120、潜水艦48→40と具体的な数値目標を据えて努力している。核兵器はみんなに影響を与えるものとして様々な世代で話し合われている。核兵器は疑問もなく一番ひどい兵器。だが、廃絶は最も難しいチャレンジでもある。全世界の事、

1、2ヶ国の問題ではない。道のりは遠い。被爆国と保有国の歩みよりが必要」との言葉がありました。証言者の話を聞き、「これからも、核を使う事はいけないと伝え続けて欲しい。メッセージを伝えようとする気持ちに感謝する」と答えられました。

取材のカメラは許可されなかったのですが、面談終了後には私たち生協のサポーターも交え写真撮影に応じてくださるなど、英国政府国連代表部の対応には優しさが感じられました。この面談に参加した人たちは「英国は核保有国で一番成果を挙げている国だと思うが、問題があまりに大き過ぎ、一国の力ではどうにもならないのは否めない。とにかく語り続けるしかない」と、口々に話していました。



英国国連代表部と、日本被団協・生協代表団メンバー

☆ 6班 アメリカ政府国連代表部との面談

国際連合本部のラウンジで、アメリカ連合本部軍縮担当大使のロバート・ウッド氏とお会いしました。まず、原爆被災者の藤森俊樹さんから、「我々は報復を望まない。核廃絶に向けた話し合いを進めてほしい」と強く訴え、中村雄子さん、福島富子さんからはご自身が味わった被爆体験を伝えました。

生協代表団の本田団長からも、生協が被爆者をサポートしながら、共にニューヨークを訪れ、核廃絶を求める運動をしていることについてお伝えし、核の廃絶に向けた交渉をお願いしました。

ロバート氏は、「遠いところからのあなた方の訪問とニューヨークでの活動はNPT再検討会議に際し、非常に重要な価値があり、私自身も心にひびいている。オバマ大統領は2009

年プラハ演説で核廃絶に向けた決意を表明しており、少しずつではあるが、核兵器削減が進んでいる。今後も核を減らす努力を続けていく」とコメントをされました。

結果はNPT再検討会議の後にしかわかりませんが、大使の発言は前向きであり、期待しつつ結果を待ちたいと思いました。



大使に要望書を渡す藤森さん



核兵器廃絶にむけた交渉を
お願いする本田団長



握手を交わす原爆被災者とロバート大使

4月27日（NY現地時間）の活動

☆1班・5班 国連ロビーの原爆展での証言活動（10～12時）

木村緋紗子さん、鮫名満さん、和田征子さん、塩瀬康雄さんの4人が被爆者の証言を原爆展の会場で行い、生協代表団はそのサポートを行いました。それぞれ約15分、合計約1時間の証言でしたが、一人一人の被爆者の熱い想いが伝わり、参加者の皆さんも熱心に耳を傾けてくれました。

生協からの参加者は、片言の英語で来場者への呼びかけを行い、折り鶴を折ったり、証言者のメッセージ（英語版・日本語版）を渡したりしました。来場者の中には証言活動をあらかじめ知っている方もいましたが、知らない方も多く、来場者への呼びかけは大切な役割でした。呼びかけには、日本から持参したユーコープの組合員さんお手製の折り鶴や缶バッジを配布するなどの工夫をしました。

戦後70年が経過した今、核戦争が起きていないのは被爆者（被団協）の方々の地道な訴えかけが国連や国際会議での広がりまでになっていること、被爆者の実相を継続して伝えることが核兵器廃絶につながると確信できました。



来場者に片言の英語で熱く
呼びかける生協組合員



折り鶴や缶バッジを来場者に説明する
生協組合員



飛び入り参加で証言活動を訪れた
岸田外務大臣（中央）

☆4班 ニューヨーク育英学園被爆体験証言の会

ニューヨーク育英学園（日本人学校）で被爆体験証言の会が開催されました。小学校1年生から6年生までの約80人の子どもたちが参加し、3人の被爆報告者が日本地図を使ってわかりやすく証言を行いました。

小学校低学年から高学年までと年齢に幅があり、理解の度合いは様々だったと思いますが、「大人は爆風でどのくらい飛ばされるのか」「どこに逃げた人が多かったのか」など、子どもらしい具体的な質問が多くあり、時折笑いが起こる朗らかな場になりました。証言した被爆者からは、「今日学んだことを家族にも話してね」とメッセージを述べました。

生協代表団からは、ニューヨークで被爆者に寄り添い一緒に活動していること、学ぶことがとても多いことなどを伝えました。終了後、子どもたち全員と先生方に向けて折り鶴と英訳の被爆体験集をお渡ししました。折り鶴はとても喜ばれ、校長先生をはじめ交流が進みました。



証言をする村田さん(右)、家島さん(中央)
平山さん(左)



生協からも自己紹介。「私は千葉県からきました。千葉県を知っているヒト!」。みんな知っていました。

☆10班 バーゲンコミュニティカレッジでの被爆の証言

木村さん、今井さん、濱住さんが写真やパネルを見せながら、1人10分程度証言を行いました。参加者は80人ほどで、教室に入りきらないほどでした。メモを取って熱心に聞いてくださる人もおり、たくさんの人たちに被爆の経験を知ってもらうことができました。

質疑応答での、「これから平和を守るため、私たちは何をしたらいいですか」という質問に対し、「見聞きしたことを伝えていくこと。小さなろうそくの火を絶やさず、灯し続けてほしい」という被爆者からの返答が印象的でした。



会場の様子

☆13班 世界経済フォーラムでの被爆の証言

世界経済フォーラム職場で働く方々約40人に、お昼休みの時間に活動しました。ボランティアのミキさんが被団協と生協メンバーの紹介をしてくれた後、長崎被団協の柿田事務局次長（被爆二世）、熊本被団協の中山高光さんがそれぞれ被爆の証言を行いました。参加者は、終始ふたりの話に真剣に耳を傾けていました。

参加した生協組合員からは、「見ている側にも関わらず、とても緊張した。外国の方々がどのように証言を受け止めるのかに注目した。お昼休みに催された証言だが、柿田さんの落ち着いた語り口調と衝撃的なスライドの白黒写真で、参加者のみなさんが食い入るように画面を見、メモをしているのが印象的だった。質疑応答では、次々と絶え間なく挙手があり、証言を聞いた上で自分の意見も持つ積極性に刺激を受けた」との感想がありました。



証言者の中山さん（左）、柿田さん（右）



証言に熱心に聞き入る参加者

☆7班 アンゲラ・ケイン国連軍縮担当上級代表との面談

日本被団協の木戸季一さん、加田弘子さん、宇田茂樹さん、生協代表団からは団長の本田英一さんはじめ7班のメンバー他が国連事務局ビルを訪れ、国連軍縮担当上級代表のアンゲラ・ケインさんに核兵器廃絶に向けた要請書をお渡ししました。

ケインさんには、日本被団協のみなさんから核兵器廃絶への想いと要請を伝え、生協代表団7班の高校生、前野智香さんから平和の願いを込めた折り鶴をお渡ししました。その後、核兵器廃絶へ向けた、日本生協連からの要請書を手渡しました。

ケインさんは今回の面談で、「人間を守ることが基本です。言葉を広げる事が大切です。皆さんの経験を聞いてもらうことが大切です。若い世代がお年寄りからバトンタッチしてリレーしていくこと、シンボルである折り鶴を作り続けることなど、みなさんの活動から物事を変えていく力を感ずることができました」とおっしゃり、その言葉に勇気をもたらすことができました。高校生の生協組合員である前野さんは、「アンゲラ・ケイン国連軍縮問題担当上級代表に直接平和のシンボルである『折り鶴』を渡すことができました。ケインさんのおっしゃっていた『若い世代がお年寄りから引き継ぐこと』の言葉を受け、私たち高校生が出来ることは何かを考え、行動につなげたいです。ケインさんの笑顔と握手していただいた手の温かさを忘れず、核廃絶に向けた活動を進めていきたいと思ひます」と述べました。



ケイン氏に要請する、日本被団協の木戸氏



前野さんからケイン氏へ折り鶴の贈呈